

## 初めての国際大会、全力で挑む



デフバスケットボール世界選手権大会日本代表

宇賀耶 崇さん 22歳  
表町一丁目

9月16日、イタリアのパレルモで開催される第3回デフバスケットボール世界選手権に日本代表として出場する。デフバスケットボールとは聴覚障害者によるバスケットで、競技中は耳に頼らないコミュニケーションが要求される。

「代表は高校時代からの憧れでした。代表候補の合宿がつかったので、最終的に選ばれてうれしかったです」  
バスケットボールを始めたのは小5のとき。現在聴覚障害者のチームのほか複数の社会人チームで活躍。「シュートを決めたときや勝ったときの喜びを、仲間と分かち合えることが面白いです」

ポジションはフォワード。攻守の要となるプレーを期待される。「初めての国際大会ですが、外国人選手に気後れることなく力を出し切りたいです。スピードでは負けたくないですね」

現在群馬大の4年生で、来年4月から社会人になる。「卒業後は日本代表の経験を生かして、仕事とバスケットを両立させるのが目標。そして2年後のデフリンピック（聴覚障害者によるオリンピック）も出場を目指します」  
将来はミニバスケットのコーチもやってみたいという宇賀耶さん。代表としての経験をあらゆる分野に生かして活躍してもらいたい。

見たい

知りたい

## 伝え隊

### 今回のテーマ「絹」



本市の近代化と繁栄の礎となった製糸業。いとこの街として栄えた面影が市内の各所で見受けられます。明治初期の本市産糸系は、独自の束ね方で欧米に輸出され、英国をはじめ欧州では「MAEBASHI」の名で取引されてきました。本市の中心地は水利に恵まれ、豊富な水が利用できたことから、製糸業が繁栄。周辺の農村地帯で作られた繭が、ここで生糸となりました。

萩原朔太郎の詩「広瀬川」の冒頭では、「広瀬川白く流れたり」とうたわれています。これは工場から排出される繭の煮汁が白く流れる様子を表現したものともいわれています。

また、繭や生糸を保管するため、れんが倉庫が数多く建てられました。多くは

失われましたが、住吉町一丁目の旧安田銀行担保倉庫などは当時を物語る姿を今に残しています。

現在、群馬県の繭の生産量は全国一。中でも、昨年度の県内市町村別生産量は本市が1位で、生産量の約25%を占めています。絹ランプで前橋駅前けやき並木を灯す「光の道」や「広瀬川ライトアップ」など、絹は市民に親しまれています。

### みんなの声

前橋の生糸商人は、莫大な利益をあげ、下村善太郎を中心にその財を前橋発展に寄与しました。明治の人を尊敬します。

（小野功一さん・前箱田町）  
前橋には、上毛かるたにうたわれる「生糸の市」だったことを伝える記念碑やれんが倉庫などが残っており、その歴史を大切に生かさればと願っています。  
（日下部邦彦さん・天川大島町三丁目）  
お蚕さんが桑の葉を食べる音は、ザクザクと、まるで雨が降りだした音のよう。幼い頃の私には、その音は子守歌でした。  
（荒井英子さん・若宮町三丁目）

今回のテーマは「前橋まつり」。参加や見学した時の思い出などのエピソードをお待ちしています。9月5日(月)までに、住所・氏名・電話番号を記入し、市役所市政発信課「見たい知りたい伝え隊」係へハガキかEメール (shiseihassin@city.maebashi.gunma.jp) へ

## クローズアップ



### 電気自動車で市内を巡る

本市が所有する電気自動車の1日無料貸し出しを開始しました。電気自動車の普及啓発と本市の観光振興を目的とした事業で、期間は10月2日(日)まで。体験した人からは、「音が静かで、発進もスムーズ」などの感想が寄せられています。



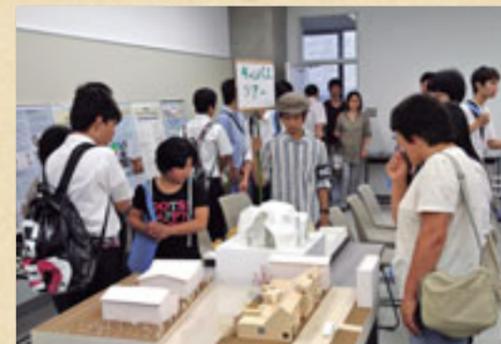
### ものづくりの現場から学ぶ

7月25日・27日に夏休み親子の工場見学を開催。増田煉瓦などを訪れ、普段は見ることでできない内部の様子を熱心に見学。ピザ作りや名刺作成など体験を通して、ものづくりの心に触れ、子どもたちにとって夏休みのよい思い出になりました。



### 文学の奥深さを感じて

前橋文学館では、詩人・小池昌代さんを紹介する「川をさかのぼってー(水の町)から(コルカタ)へ」を9月11日(日)まで開催しています。萩原朔太郎賞を受賞し、小説家としても活躍する小池さんの独自の世界観に触れることができます。ぜひ、お出掛けください。



### 工科大キャンパスへようこそ

7月31日、工科大でオープンキャンパスを開催。来年度入学を検討している高校生などが大勢参加しました。各学科紹介の他に、工科大生が行った学生相談会やキャンパスツアーなどでは、参加者と工科大生が楽しく触れ合いながらキャンパスを巡りました。